

東京の観光振興を考える有識者会議
江戸の歴史・文化部会（第3回）
議事録

令和6年10月22日（火）16：00～17：00
都庁第一本庁舎7階大会議室

【江村観光部長】

お待たせいたしました。これより「東京の観光振興を考える有識者会議 江戸の歴史・文化部会」の第3回を開会いたします。

本日は、御多忙の中、御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

議事に入るまでの間、私、産業労働局観光部長の江村が進行役を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

まず、本日の資料を確認いたします。

お手元には、議事次第、座席表、資料1の委員名簿、資料2の本部会の設置要領をお配りしております。資料3の部会における議論の概要の案、資料4の取組の方向性の案、資料5の委員からの主な意見につきましては、卓上のタブレット端末で御覧いただけます。また、第1回及び第2回会議の資料につきましても、同様にタブレット端末で御覧いただけます。

端末は御自由に操作いただけますが、事務局がページ送りを行った場合は、皆様の端末にも同じページが表示されますので、あらかじめ御承知おきください。

続いて、マイクの操作について申し上げます。

御発言の際、マイクの右側のボタンを押していただき、赤いランプが点灯してから御発言いただきますようお願いいたします。御発言が終わりましたら、再度同じ右側のボタンを押してマイクをオフにしてください。

次に、委員の皆様の出席状況を御報告します。

本日は、後藤委員が所用で御欠席との御連絡をいただいております。

それでは、この後の議事進行につきましては田川座長にお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

【田川座長】

皆さん、お疲れさまでございます。

それでは、まず、会議を進行させていただきますのに、小池知事から一言御挨拶いただければと思います。よろしくお願いいたします。

【小池知事】

皆様、江戸の歴史・文化部会、本日の有識者会議、御多忙のところ御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

江戸の歴史、そして文化、もう本当に深いものがあって、そのことを皆様方にさらに深めていただくことと広げていただくことと、この両方のことでお世話になっております。ありがとうございます。

また、これまでも様々なアイデアを頂戴してまいりました。感謝申し上げます。

伝統文化や当時の風格を残します大名庭園なども各地にございます。観光客の方々にもっと楽しんでいただく工夫について、闊達な御議論も賜っていると

ころでございます。

江戸の町の成り立ち、また約300年にわたって続いた平和の価値というのは、今、改めて見直される価値ではないだろうか、誇りにすべき価値ではないだろうか、このように思うところでございます。

また、深く知れば知るほどますます知りたくなるというのが江戸の魅力だと思いますし、最近も、浮世絵1つ取りましても、広重の元祖漫画家みたいところを知れば知るほど、ますます浮世絵にも深みが出てくるか、幅が出てくるかというところ、大変興味深く思うところでございます。

グッドニュースは、旅行雑誌で『コンデナスト・トラベラー』という雑誌がございまして、こちらは3年ぶりに東京が1位に輝いたということでございます。

これは「世界で最も魅力的な大都市ランキング」の1位に帰り咲きということで、本当に伝統と革新、この両方が東京の街の深みを、また世界の皆様方の興味をひいている最大のポイントではないかなと、このように思います。

ここに江戸の魅力をこれまで以上に加えていきたいと思っておりますので、今日は、江戸の歴史・文化を活かした観光振興の方向性についての案をまとめているところでございます。東京と江戸の関連性は、あまり世界の方はお分かりでないのが現状です。それと、このマーク（胸元のバッジ）もTokyo Tokyoでつけているんですけど、江戸東京博物館のほうも今リニューアルの真っ最中でございます。この辺の打ち出し方とか江戸と東京の関連性をどう印象をつけていくのかなどなど、いろんな観点から考えていかなければならないと思っておりますので、今日も皆様方の御意見をよろしくお願い申し上げたいと思っております。

今日も有識者会議を楽しみにいたしてまいりましたので、どうぞよろしくお願いいたします。とはいえ、公務のため御挨拶だけでこの場を失礼させていただきます。よろしくお願いいたします。

【田川座長】

ありがとうございました。

それでは、小池知事は都合により退席させていただきます。ありがとうございました。

（小池知事退室）

【田川座長】

それでは、議事を続けたいと思います。

本日は、部会での議論の取りまとめを行いたいと思います。まず、私から部会における議論の概要について御説明をし、次に、事務局から今後の取組の方向性について説明をいただき、それで、その後、意見交換を行いたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、私から説明を少ししたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、資料の3につきましてちょっとお話をいたしますので、よろしくお願いします。

資料3の「『江戸』の魅力と価値を再考する」ということで、「江戸の歴史・文化部会における議論の概要」を御覧いただきたいと思います。部会でのこれまでの議論を取りまとめておりますので、簡単にお話をしたいと思います。

1 ページ目、2 ページ目、委員の構成や部会における議論の目的、主な論点についての振り返りは割愛をさせていただいて、3 ページ目から順番にお話をしていきたいと思います。

その前に、余計ですけども、ドジャースが地区優勝して、その中にエドマンという方がいて、MVPを取りまして、今日のニュースからずっと江戸の男と書かれて、日本中に「江戸男」が随分PRされているので、この部会にふさわしいかなというふうに思っております。余計なことですが。

それでは、3 ページ目からお話を進めます。議論のポイントを大きくまとめておりますので、順次お話ししていきます。

3 ページ目、学術的な見地、観光業務目線などから、皆様から様々な御意見を頂戴いたしました。大きくりに分けますと、「『江戸』の特色・独自性」、それから「今も息づく『江戸』とその歴史的価値」、それで「観光における活用の工夫」ということで、3つの切り口で御議論をいただいたかというふうに思います。

それでは、4 ページ目を見ていただきますと、まず、「『江戸』の特色・独自性」についてであります。江戸の町の成り立ちに根差した特色という観点では、徳川家広委員や大石委員から、戦乱後の「平和」な時代の町として、仏教・茶道・能が果たした役割の重要性、あるいは、藩邸を通じて全国諸都市との交流をするといった特性について御知見をいただきました。また、時代と地名の両面があるということも「江戸」の大きな特徴だというふうに思います。

5 ページ目を御覧いただきたいと思います。250年以上の長きにわたりまして維持された「平和」について、先ほども知事からもそのお話がありましたが、これもやはり非常に貴重で、世界的に見ても客観的・普遍的な価値を有するものだと思っております。大石委員からは、様々な落首や川柳を御紹介いただきながら、庶民の高いリテラシーが平和の礎だったと、大変興味深いお話もいただきました。また、非常に多くの人々が暮らす中で、安全、あるいは清潔が保たれているという今の東京の特徴も江戸に根差していると、そういったお話もいただきました。

6 ページ目を御覧ください。次に、「今も息づく『江戸』とその歴史的価値」であります。現代の東京に受け継がれる江戸の遺産について様々な御知見を賜りました。まず、建築遺産、江戸城の石垣や城門、やぐらなど、非常によい形で残っておりまして、大名庭園もよく保存されていると、後藤委員などから

も御紹介いただきました。神社仏閣も当時の風格を今に伝えているということでもありますので、その歴史的な価値も大きいというふうに感じております。

7 ページ目を御覧ください。土木遺産も見逃せないところであります。「水」は江戸を語る上で欠かせない重要なテーマであり、玉川上水をはじめ江戸の初期に整備された上水インフラは、今でも都民の生活を支えています。また、江戸を中心とした五街道の重要性についてもお話をいただきました。文化という面では、歌舞伎や落語、浮世絵などが貴重な遺産であることは言うまでもありませんが、江戸の文化は街並みや食文化においても形を変えながら脈々と受け継がれていると、興味深いお話をいただきました。

8 ページ目を御覧ください。次に、「観光における活用の工夫」であります。この観点では、徳川眞木委員から、庭園が有する奥深い魅力とその楽しみ方についてプレゼンテーションいただきました。また、堀口委員からも、水路を活かして川から見る観光や体験型のコンテンツの活かし方について御意見を賜りました。

9 ページ目を御覧ください。葵の御紋をはじめとした印象的なビジュアルや、AR・VRなどデジタル技術の活用といったアイデアも頂戴をしたところでございます。また、江戸の歴史・文化に対する都民の理解や愛着を醸成するということとは大切であるといった御趣旨の御意見を複数の委員からいただいたかと思えます。

10 ページ目を御覧ください。以上を踏まえまして、最後のページで議論の総括をしております。「江戸」を観光資源として活用する余地が大きいことは間違いのないところでありますが、世界遺産として打ち出していくことが効果的だろうというのが1点。次に、江戸が持つ奥深い魅力に旅行者が触れられるよう工夫を凝らしていくべきであるということが2点目。そして3点目に、この街に住む都民の「江戸」への理解や愛着を育んでいくことが重要であると。この3点が大きな眼目であったかというふうに思います。

私からの説明は以上でありますので、御参考までにしていただければありがたいと思えます。

それでは、続きまして、事務局から資料の説明をお願いいたします。

【前田観光振興担当部長】

観光振興担当部長の前田です。

それでは、「江戸の歴史・文化を活かした観光の一層の推進に向けた取組の方向性」の案を御説明いたします。

まず初めに、江戸の歴史・文化を活かした観光を推進する意義でございます。

250年以上にわたる平和を築き、世界最大の人口を誇った江戸には、多彩な文化が花開き、高度な土木技術も発展しました。今も息づく江戸の歴史・文化は、東京の貴重な魅力です。

東京の魅力を国内外にPRするアイコン・キャッチフレーズ「Tokyo Tokyo Old meets New」は、江戸から続く伝統と最先端の文化が共存する東京の特色を表現しておりまして、江戸の歴史・文化の活用は、東京の観光振興の大きな柱の1つでございます。

江戸の歴史・文化は多彩で奥深く、旅行者が理解し楽しむためには、一層の工夫が必要となります。

そして、東京の観光を振興する上では、都民や事業者が地元の文化や歴史など地域の魅力に理解や東京への愛着を高めていくということが重要であろうと考えております。

続きまして、取組の方向性でございます。

委員の皆様の御議論を踏まえた3つの方向性で、江戸の歴史・文化を活かした観光を一層推進してまいりたいと考えております。まず、「『江戸』を知る～江戸の歴史・文化の魅力や価値を共有～」、「『江戸』を発信する～江戸の魅力・価値のPR強化～」、「『江戸』を楽しむ～江戸の歴史・文化を感じられる観光コンテンツの創出・活用～」でございます。

続きまして、各方向性につきまして詳細を御説明申し上げます。

まず、「『江戸』を知る」についてでございます。

江戸の歴史・文化の都民や事業者等との共有ということですが、江戸の歴史・文化への都民など人々の理解はまだ十分ではないというところがございますが、都民が東京への愛着を深めるには、江戸時代から続く地元の文化財を効果的に活用していくということが重要であろうと考えております。江戸の町の成り立ちや東京に今も息づく江戸の歴史・文化の価値や魅力などを都民や事業者の方々と共有する機会をつくるとともに、地元の文化財等を活かした地域の観光振興の取組を支援してまいりたいと考えております。

また、子どもや若者が江戸の歴史・文化に親しむ機会の提供といたしまして、江戸を身近に感じられるようにすることも大切だと考えております。そのため、子どもや若者、ファミリー向けに江戸文化に接するきっかけをつくっていくとともに、デジタルコンテンツの活用等により、文化財への子どもたちの興味・関心を喚起してまいりたいと考えております。

次に、「『江戸』を発信する」につきましては、都はこれまでも江戸の魅力を積極的に活用してまいりましたけれども、「江戸」の国際的な認知度という点では、その向上に向けては一層強く打ち出していく必要があると考えております。そのため、江戸の歴史・文化のPRを強化して、世界の「EDO」として強力に印象づけ、江戸から続く伝統に関心を抱く旅行者の獲得を促進してまいりたいと考えております。

また、旅行者への発信の充実についてですが、旅行者に江戸の魅力の本質を理解し楽しんでもらうためには、歴史的な背景ですとか経緯などのスト

ーリーを丁寧に伝えていくことが大切であろうかと考えております。また、「江戸」の歴史・文化を感じられる建造物・スポットや伝統文化について、旅行者に分かりやすく紹介するコンテンツを用いて発信するとともに、江戸東京博物館のリニューアルオープンに向けたPRも行いまして、旅行者の期待感を醸成してまいりたいと思います。

最後に、「『江戸』を楽しむ」についてでございます。

旅行者による「江戸」の魅力の体験を促進します。東京に今も息づく江戸の歴史・文化は多種多様でありまして、また、東京だけではなく日本各地にも、江戸時代の文化というものを感じられる観光地が多数存在しております。奥深い魅力を秘めた庭園を江戸の歴史・文化を感じられるスポットとして活用することは大切であるということも考えております。そこで、都内各地の名所の回遊をサポートするほか、日本各地と連携をいたしまして江戸時代をテーマとした観光スポット等を発信しまして、東京と日本各地との周遊を推進したいと考えております。また、旅行者が文化財庭園の魅力を感じられる催しなども展開してまいります。

地域や事業者による取組を推進するためには、江戸の風情を東京の魅力として根づかせるための街単位での、街ぐるみでのイメージづくりですとか、江戸をテーマとした旅行商品が提供されることが必要であると思います。そこで、江戸の情緒を感じられる街並みを創出する地域の取組を支援するとともに、旅行事業者が江戸の歴史・文化について知見を深める機会の提供や、その知見を活かした魅力ある観光ルートの開発を支援することなどにより、効果的な誘客を推進してまいりたいと考えております。

事務局からの御説明は以上となります。

【田川座長】

ありがとうございました。

それでは、皆様から御意見をいただきたいと思いますが、本日御欠席の後藤委員から事前にコメントをいただいておりますので、まず後藤委員のお話を事務局から御紹介いただければありがたいと思います。

【前田観光振興担当部長】

それでは、後藤委員の御意見を御紹介いたします。

都内には、江戸の文化や歴史を知ることのできる公立・私立の博物館・美術館が数多く集積しておりまして、こうした施設間の連携を促す工夫も大切ではないか。

それから、国際的なホテルや江戸の歴史・文化に関する観光ボランティア団体などと協力し、国内外の旅行者への観光案内を充実することも一案である。

都内にある多くの文化財を効率的に回遊するには、自転車等を活用することも有効であるという御意見をいただきました。

【田川座長】

ありがとうございました。

それでは、皆様から御意見をいただきたいと思います。

部会での議論を振り返っていただくとともに、今日お手元にお渡しした資料の御意見、御感想、それから会議でいただいた御意見の補足、あるいは提案をいただいた活かした取組の方向性についてもお話をいただければありがたいと思います。

それでは、順次、全員にお話をいただきたいと思いますので、名簿順で申し訳ありませんが、大石先生から順番にお話をお願いいたします。

【大石委員】

すごく的確にまとめられていると思います。

最近ですが、1つは、私が岩手県の一関市の博物館で少し講座みたいなのを担当したのですが、そこの一関では江戸藩邸の発掘成果というのを大々的に展示してしまして、それとの関連講座とか講演とかというのを企画しています。むしろ東京にいては分からないようなことが、地元というか藩に行くと、ああ、なるほどというので、こういうことがあるんだというのが分かりました。資料も、江戸藩邸に関する資料がたくさん博物館にも残っていたりしまして、江戸・東京を知るとというのが、実は日本の中の外から見た視覚とか資料とか、全国的にもそういう地域から江戸を見るという関心も高くて、随分見に来る人も多いようでしたので、そういう形で江戸・東京を日本の中でもっともっと周知していく、あるいは関連性を強化していく、その仕事は必須かなというふうに思いました。

それからもう一つは、今、私の勤務先が静岡市歴史博物館ですが、そこで江戸東京博の巡回展をやっています。これもその前は岡崎でやっていたして静岡へ回ってきていますが、岡崎でも大変な評判でしたし、静岡でも今評判になっているところです。先ほど出たように江戸博が休んでいるから、その間ということなのですが、これ、同じ規模でやると職員の人が多分大変になっちゃうと思いますが、何らかの形でこういう各地域の博物館とか地域の資料館とか、そういう歴史関係の館と江戸博との結びつきというのをしっかりしていくと、またこれも現代の地域と東京との関係が強化されてくるかなというふうに感じています。

以上です。

【田川座長】

ありがとうございました。

江戸博の巡回というのは、これはずっとやっているのでしょうか。今、何かそういう決まったルートでやっているのでしょうか。

【前田観光振興担当部長】

年間のスケジュールは決めて、江戸博がオープンするまでの間ということで実施しております。

【田川座長】

今、静岡でおやりになっている。ありがとうございました。

それでは、徳川家広委員、よろしくお願いします。

【徳川（家）委員】

ありがとうございます。

頂きました資料、これまでの議論を基にしてちょっと今思ったことを申し上げますと、発信のために、楽しむためにもよりよく知るという作業が重要かというふうに思っておりますと。

江戸時代の初期に江戸幕府の当局者が何を考えて江戸の町の仕組みをどうつくっていったかと。

それでもう一つ、今の世界において決定的に重要な平和構築の問題というのがありまして、今、2つ大きな戦争が起きているわけですがけれども、これ、いずれは終わります、その後で、ここまで血を流したことを、忘れるとは言わないですがけれども、さておいて、平和な関係、共生関係をつくっていかなくてはならないと。

そのときに、実は江戸の町で行われたことは、これ、人口の3%ぐらいなのですよね、江戸時代、人口3,000万に対して100万ですから。今の東京都が日本の10%なのですけど、江戸時代、3%で、ものすごい少数派であったと。その中でかなり実験的に、和を育むというのでしょうか、英語のPeace——前も話したかもしれない。英語のPeaceは平和の「平」だけであって、平和、「平」と「和」は違いますと。戦争のない状態が「平」で、人間関係がむつまじい状態が「和」ですと。「平」がなければ「和」は不可能ですが、「和」がなければ「平」は長続きしませんといったような深い意味合いがそこにはあるのだと私は考えておりますと。

江戸の町でその平和、江戸時代の日本社会全体でどうやって乱世で発生したとげとげしい人間関係というか、お隣にいる人に対する猜疑心、恐怖感というのをどう克服していくかと。私の暫定的な結論は、とにかく忘れることが大事と、水に流しましょうと。リー・クアンユーは「Forgive, but never forget」と言っておりましたが、逆のほうの方がむしろいいかもしれませんと。許すことは凡人には難しいですが、忘れることはすぐ非常に簡単でございますと。ということで。でも、こういったことをちゃんと、日本人の経験を踏まえるところなのですと。

前から何度も申し上げていますが、東京に来た人たちは、何でこの人たちはこんな狭い中でけんかせずに生きているのだということを非常に不思議に思っています。あとは、住宅なんかも狭いのに非常にコンパクトによくまとまって

いる、お弁当箱の中のような秩序に感心していると。それらは全て長年にわたる幕府であり町奉行所であり、さらに東京市、東京都といった江戸・東京における行政の努力のたまものでありまして、それは発信しないといけない、調べないといけない。

また、一例を挙げますと、江戸の治安機構ですね。これは、私、観光の対象に警視庁というのも非常に重要だと思っていて。何かといいますと、江戸時代の捕り物というのは、どうやって暴れる人を殺さないで捕らえるかということに異様な執念を見せていた。はしごとか、さすまたとか、そのための道具を開発したりまでしているのですよね。

今の警視庁にも逮捕術というのがあって、これは武道として認められているようです。

それと、今、インバウンドというと、欧米の方を中心に見られているのですが、これ、為替の円安もいつまで続くか分からないということもあって、やはりアジア近隣諸国、こっちもものすごく所得水準が上がっています。これは非常に大事だと思っています。

例えば、韓国の方は延べにして7人に1人が日本に来ている計算だそうです。じゃあ、韓国の方は江戸時代のことをどれぐらい知っているかというと、実は全然御存じない。今の江戸博の巡回展も、ソウルに行ってくればいいのにと私は思うくらいでございます。

もう一つ多いのが台湾のようです。こちらは6人に1人、ここが一番多いです。「日本、好きですよ」と言う人は多いですが、大河ドラマはもう次の週には皆さん見ているようですけれども、でも、体系立って、日本の歴史について、日本から働きかけて何かもっと理解してもらおうというような努力は、まだ少ないのではないかと思います。

ですから、これは都市間外交といったことにもつながるのかと思います。そして何より、まだまだ分からないことというのがたくさんあるので、それを解明するための努力ということに東京都様から御助力が、御支援があればいいのかなというふうに思っております。

そしてもう一つ、楽しむの部ですけれども、実は江戸文化というのは、これも前から申し上げていることですが、ハードの面では第二次大戦であらかた破壊し尽くされてしまいました、残念ながら。なぜ石垣が残っているかと。それしか残らなかったからであります。

なんですけど、江戸文化自体は脈々と続いていて、一番最近で象徴的なものは何かと。私はカツカレーだと思っています。だって、日本のカレーライス、日本にしかないのですよ。日本のとんかつも、日本にしかないのですよ。でも、もともとは違います。インドからイギリス経由で日本に入ってきたカレーがあった。だから、ルーとか、あれはフランス語なのでございます。とんかつもま

た、コトレッタミラネーゼとかと言っていたイタリアのディッシュが日本に来てどんどん分厚くなっていったと。そういった経緯があって、さらにその2つが加わって、そしてなぜかイギリスで受けていると。そういった経緯があるようですね。

じゃ、なぜそうなるかという、それは江戸文化のたまものですよと。京都では、日本料理というと懐石料理で、これはずっと前に完成したものを踏襲しています。中国の人も、中華料理というような、ずっと前にできたレシピをゆっくり改善しながら続いているのですが、日本だけ突然変異的に出てくるようですね。それはどこから来ているかという、江戸の町の文化です。全国からいろんな人が流入してきて、何か新しいことをやろうという文化がそこで生まれて、今に至るまで続いていると。

だから、江戸を知りたかったら、今の日本に行ってこれをエンジョイしなさい、それは江戸をエンジョイすることでもありますと、そういうメッセージを発信していただけることが一番効果的かというふうに思います。

【田川座長】

ありがとうございます。なかなか面白い視点でいただきました。

それでは、徳川眞木委員、よろしくお願いします。

【徳川（眞）委員】

ありがとうございます。

今、論議を重ねてきて、取組の方向ということで事務局がまとめてくださったことを思い返して1つ考えていただきたいというのは、以前、私の経験の中で、イコモス、世界遺産の取組をしている地方都市のシンポジウムをしたときに、事務局を御経験になったイコモスの方から言われたことは、日本人が日本語で自分たちの歴史や都市の魅力を説明しているから、これを英語にした瞬間に相手には分からない内容になっていると。シンポジウム、2時間、3時間、熱を込めた論議をしたとしても、これを英語に限らなく世界の基準言語に直して、逆に分かりやすく説明をするという工夫をなさйтеというアドバイスをいただきました。

ですので、今回ここまで整理をしていただいたので、事務局にお願いしたいのは、1つずつ、では、「東京」というのは、土地なのか、そこに住む人なのか、そこに働く人なのか、どこまで概念をしているのか。私たちが日常当たり前だと思っているワードに、そういった相手、観光振興、観光に来ていただく方から見た目線での説明が十分に行き届くように、言語を変えてみるという工夫をされてはいかかかと思っております。その上で、基準となる私たちの共通認識の方向性の取りまとめをされたらよろしいのかなと思っております。

それから、文中でちょっと気になりましたのが、「庶民」というのはどういうことを指すのか。階級的な社会で階級のない人たちのことをいうのか、その

辺りも不明だなと。

私たちはいつも庶民、庶民と言っておりますが、実は東京は將軍のいた町ですから、要は支配権力のある將軍もいれば、その將軍に仕える幕臣の人も生活をしている場所で、そのほかに全国から集まっている諸侯の士族もいますし、彼らと一緒に生活をしている商人の人やいろんな労働を支えている町人の人たちがいます。なおかつ、東京は、ある意味、農林水産業も今でもきっちり生活者がおりますし、その上で最大のエネルギーを持っているのは、それらをつなぐ商業者です。

ですから、やはり今まで先行していたのは、日本橋や銀座というイメージに先行するように、東京にその多様な人が住むので、つないでいる商業者がいる。そのエネルギーが前回の論議の中で十七、八世紀には大阪を凌駕するぐらい東京は日本で最大になったということです。やはり庶民の町と言い切ってしまうのではなく、東京が日本において全ての人が住んでいた巨大都市というところをやはり忘れないでいただきたいなと思っています。これは、日本の京都や奈良や大阪、そのほかの都市にはない、東京だけが持っている個性だと私は思っております。

あと、私が前回地域の担い手を育てるための教育について少しお時間をいただきたいと言って、いろんな資料集めをさせていただいた中で、地方での取組で有力だと思われるのは、現在、やはりドラマ、映画、それから音楽に取り入れられている地域というのは、コンテンツと一緒に世界中に瞬時に広がって、逆に私たちの観光誘致をしている側では気がつかないところも、そういった無形の発信の仕方注目を受けている。ですので、こういったコンテンツのロケ地などのツアーなどというのは、非常に有益で効果が高いというお話を伺っております。そのことを御報告させていただきます。

以上です。ありがとうございます。

【田川座長】

ありがとうございました。

それでは、堀口委員、よろしくお願いします。

【堀口委員】

私が先生方のお話を拝聴して感じましたのは、世界に江戸の魅力、また日本中の人たちに江戸の魅力というのを伝えていくときに、家広様がおっしゃったように、やはり平和というものはとても非常に世界に訴えるときに魅力になる個性なのだなというふうに感じました。本当に宝物のような時代が江戸時代であり、そして江戸という都市なのだなということを感じまして、そういったことを世界に発信するときには、やはり眞木様が御指摘されたように、その分かりやすさというのは本当に重要な部分になってくるなというふうに感じまして。

では、何だったら分かりやすいだろうというところを考えました。大きく2つあるのかなと思っていて、1つは、五感に訴えることなのかなというふうに感じました。例えば外国の方に見て分かる、聞いて分かる、香り、嗅いで分かるとか、触って分かる、味わって分かるという部分というのは、すごく感覚的に伝わりやすいことなのかなと思いますし、そういった海外の方に伝わるということは、恐らく子どもたちにも伝わりやすい手法になってくるのかなというふうに考えます。一例で言いますと、先ほど大石先生が一関藩のお話をされていて、私はまだ実は拝見できていないのですけれども、そういったものを見るであったりとか、例えば今、東京にある博物館ですと、深川江戸資料館などに行きますと、見るだけではなくて、建物が再現されていて、その中に入って物を触ることもできるというところまで体験できますので、そういった場所というのが増えていく——江戸東京博物館も来年またリニューアルいたしますし、そういったところを連携して、例えばスタンプラリー的な手形なのか、江戸風に言うと手形を集めてコンプリートすると江戸的な何かがもらえとか、分からないですけれども、そういったゲーム性を持たせてですね。あと、東京たてもの園ですか、江戸博の分園になっている、あれもすばらしい場所ですね。そういったところをちょっと回遊できるようなルートをつくるというのも1つなのかなと思いました。

分かりやすさという意味では、もう一つは、エンタメとのコラボレーション。これは眞木様も先ほどおっしゃっていたように、私なんかはアニメや漫画がとても好きなのですけれども、そのモデルになった都市というのは、日本に限らず、世界でも行きたいというふうに感じます。また、家広様も先ほどおっしゃっていたように、日本の江戸時代のことを海外の方が御存じないという状況は確かにあって。でも、例えば韓国の朝廷の宮廷劇であったりとか、中国の昔の古い時代劇とかを見ているので、そちらのお話は知っているのに。同じような楽しいエンターテインメントとして江戸時代というものを届けることができるのは、それはもしかすると「SHOGUN 将軍」という今とてもはやっているドラマなのかもしれないし、アニメなのかもしれない、漫画なのかもしれないのですけれども、そういった何かメディアミックスな形で江戸というものが分かりやすく広がっていくという形が今後生まれてくると、また一步こういった試みが前進していくのかな、なんていうふうに感じたところでございます。

【田川座長】

一通りありがとうございました。

幾つか共通していることが、事務局から頂いた資料、それからまとめた資料の中にありました幾つかのちょっと整理をしておく必要があるかなと思うのは、「平和」についてですね。江戸時代の平和とは何だったのか。それはどういうふうにして世界に発信したほうがいいのか。多分、世界遺産にもし登録しよう

としたら、必ずそういうことを問われると思います。そのときに、どういう説明というか、言語というか、言葉で説明するのが一番適切かどうか。多分そういう話になっていくと思うので、ここら辺りは少し、さっきPeaceのなかなか面白い「平」と「和」の話をお伺いしましたが、その視点も入れながらお話を前へ進めたいなというふうに思います。

それからもう一つは、大石先生が言われた、やっぱり地方に行くと江戸のことがよく分かります。逆に、江戸にいと江戸のことが分からないと。この視点はすごく大事なかなと思います。諸藩、当時300諸侯ぐらいあったと思いますけども、それが今47の都道府県に変わっていますが、それぞれのところで昔の大名さんの美術館や博物館があります。我がふるさとの福井にも松平さんの、春嶽さんのものがあります。高知でも山内容堂さん。そういうところに昔の江戸の名残が残っていて、東京の人はあまり見たことがないのですけども、地方の人はそれで江戸を感じる。それは逆に言うと、東京都としてはどういうふうに一例えば全国知事会みたいなところでそういうのをやるのか分からないけど、どういうふうに、やっていったらいいですかね。結構大事な視点かもしれない。江戸時代というのは、「江戸」の土地名と時代というのが2つあったので、その2つがすごく大事だと思って、両方とも大事なので、時代というのを示すためには、そういうことがちょっと必要だなと感じます。

【大石委員】

先ほど言った一関は、私、恥ずかしかったのですが、藩邸が新橋辺りに、上・中・下屋敷、その藩邸の発掘がどんどん進んでいて、その発掘の成果を一関で見せているようです。だから、東京にいる人がそれを知らなかったり、知っていてもあまりというのが、かえってあちらへ行って私も、ああ、ここまで発掘が進んで研究が進んでいるのだというのが分かったという点では、やっぱり東京だけで済ませられないという。

さっきの眞木さんの話が象徴的なのですが、地名オンリーでもない、時代オンリーでもない、そこに風物、文化、文明、そういうものを含めた「江戸」というのでしょうか、そういうものを私たちは共有していく必要があって、そういったことは、実は江戸だけでは成り立たないもので、地域もすごく感覚を研ぎ澄ませていて、そういう発掘をどんどん、知ろうとしているということは、やっぱり文化行政とか教育行政とか、もちろん観光もですが、そういうものの回路というものをもっともっと膨らませていって充実させていくと、東京のことを地方も知るし、地方を通じてまた東京に返ってくるという、そういうことが見えてくるかな、できるかなというふうには思いますけど。

【田川座長】

少し大事だなと思っているのは、今、一極集中の話とかが東京にありますけども、やっぱりいろんなお客様を日本中に回遊させるということが東京の使命

としてもあるのではと思います。そういうときに、江戸というのは、そういう回遊させるための道具立てとしてはなかなかいいかなというふうに感じるので、さっきちょっと聞いたのは、今、江戸東京博物館が閉まっているので回遊しているという、そういうスケジュールが一緒になっていれば、何かそういうことを。全国の人に江戸時代を感じてもらう、そのことによって東京を再度見直すみたいなことができる」とすると、それを世界に発信すると。こういう論法でいくと、江戸時代の話がもっと広がるというか、大きくなるのではというふうに感じたので、ちょっとお聞きしました。

それでは、徳川家広さん、何かありますか。

【徳川（家）委員】

これは眞木様の話とも関連するのですが、やっぱり英語発信というのが決定的に重要でございます。最近も、ドナルド・リチーという日本映画の権威が東京の本、写真集みたいなものを監修しておいででしたけれども、実はまとまりのいい日本史の通史とかは、英語のほうが、外国のことなので、分かりやすく書いてくれている例があるのですが、これはなかなか日本語になりませんし、日本語で書かれたいい本は、日本人としての共通認識みたいなのが濃過ぎるので、外国語にすると途端に分からなくなってしまうというような状況がございます。だから、ここの交通整理は非常に重要ですし、かなり時間がかかるかと思っています。

【田川座長】

徳川眞木さんも、そういうさっきのPRするための言葉みたいなのを大事にする必要があると。

【徳川（眞）委員】

現代の人は、江戸時代に生まれて実生活をしていたわけではないので、全て教育で入ってきたものなので、これを多言語にしてみて、教育を受けていない人が分かるように安易にし、そしてイメージを整理することは、とても日本語に戻したときにそれはコンパクトで伝えやすい。そして、そのために、オリンピックの経験がありますから分かれると思うのですが、なるべく言葉を使わない、ビジュアルで表現する。そうすれば、五感に訴えればそれは伝わるというのが私たち博物館に求められているスキルなのですけれども。

今、座長がおっしゃったとおり、地方から見た江戸時代というのを知るためにというので、昨日、たまたま体験型のツアーを求めている外国人が増えていますよというテレビ番組を拝見しました。その中で、お茶というテーマを追いかけた方がいらしたのですが、私たち、日本橋に行けば——日本橋というか、お店に行けば、全国の名茶がある。ですから、東京で日本を、全国のものを見て、じゃあ、私はその産地まで行って産地でしか経験できない体験をしようというようなツアー。

つまり、やはり東京インで、東京で選んで、自分の深掘りをしたいもの、焼き物の産地、ファッションを求める。京都の好み、それともかすりだとか、そういう丈夫なものを見に行く。建物を見たい。そうすると、東京でいろんなスタイルの建物、お城から農家のかやぶき屋根まで見て、私はそこの生活を見たいということで、東京発信の結局体験のツアー。田植えなんかも、米食をしない国の人とはとても面白いと思います。

【田川座長】

多分、回遊性をたくさんつくっていくというのは、これから日本の例えばインバウンドの大きなテーマですから、そういう意味では、「江戸」というのをキーワードにして回遊性を増やすための努力は、東京都としてもしなくちゃいけないのかもしれないですね。

それについて、堀口さんは何かありますか。先ほどエンタメとのコラボみたいな話がありましたけど、今、若い人には一番人気があるけれど、持続性から言うと、そういうものをどうやって、やっていったらいいのかなというふうにちょっと思います。

【堀口委員】

でも、おっしゃるとおりで、地方と江戸の結びつきがこれだけやっぱりあるというのは、五街道が整備されたり、家康公が、そしてその後の幕府が受け継いでいったこの方針というのが、江戸にやってきて地方に戻って、また地方から江戸に来てという流れがあったというのは本当に魅力的なことの1つだと思うので、だから、本当に東京にまずは来てそこから地方にというルートをつくるのは確かに面白いなと思いましたし、それは日本人にとっても多分面白いことになるので、やっぱり私なんかは、そういったコラボイベントとかですと、集めるのが楽しいので、スタンプラリーだったりとか、何かそういったちょっとゲーム性を持たせるというのが、若い方たちだけじゃなくて、じゃあ、3世代、子どもとお父さん、お母さんとおじいちゃん、おばあちゃんとかで楽しめるようなコンテンツにもしていけるのかなという気がしました。

【田川座長】

ありがとうございました。

それから、先ほど御質問があった「庶民」という言葉の使い方とか定義とかは少し整理をしたほうがいいかなと。言葉というのはすごく大事なもので、取りまとめをするときに、資料の中にもそういう言葉がありましたので、ちょっと。確かに、江戸・東京というのは通常の都市とは違う仕組みがあったので、そういう意味では、士農工商という大きな役割の分担があったのですが、それと同時に、東京の町民とかという文化というのはまた別にありますから、「庶民の暮らし」というのを、一般論として、今の時代には使えるかもしれないけど、江戸文化の中で使うとなると少し整理したほうがいいかもしれないという

ことですね。分かりました。それもいただいております。

【徳川（家）委員】

ちょっと補足的に。

江戸文化で、最後に今でも残っているものがやっぱり江戸の庶民文化だったということで、これは私が幕府当局者の考えていたことを想像して言いますが、紛争再発を防ぐためには、なるべく格差が少ないと、貧しくても惨めにならないということはかなり意識して、そこからリサイクル文化とか。あれはエコじゃなくて、やっぱり貧しい人でもちゃんと着るものは買えますよということだったというふうに考えておりますと。

そしてもう一つは、庶民のほうで新しい文化が湧いてきて、各藩邸のお侍さんですとか駐在族、それから旗本、御家人も、そっちのほうに遊びに行って庶民文化を吸収していくと。つくり手の多くは実は武士でしたという状態もあって、非常に距離感の短い、あるいは格差の少ない感覚というのは、恐らく江戸の町が初めてであろうと、日本史においては。

それともう一つは、文化の多くは、やはり日本中から集まってきた、しかも男性が圧倒的に多い江戸の町で、争い事が少ないようにと幕府が誘導している気配が非常にありました。最近私がよく使うのは、総合格闘技の有名な選手とお相撲さんの写真と絵を並べて、どっちが原型かと。要するに、伝統的なお相撲が進化して総合格闘技になっていったかということ、実は昔は本当の格闘技だったのですね。でも、相撲興行をすると集まってきた人たちが興奮して乱闘になってしまいます。しばらく禁止されて、土俵をつくって、四十八手を決めて、ファミリー向けのものにした上で興行を再開したと。だから、今の不思議な鏡餅みたいなお相撲さんのほうが後なのですね。歌舞伎も何もかもそういう誘導がかなりあったというふうに見るのがいいのではないかと。

【田川座長】

先ほど家広さんから警視庁のお話がありましたけど、多分、江戸時代に町奉行という役割がどういう役割だったかというのは、今の防災とか安全とかには結構ヒントになることが多いのではないかと。

【徳川（家）委員】

あとは、やっぱり消防庁の出初め式。

【田川座長】

あ、出初め式とかね。そういう文化ができたのがやはり260年も続いた成果ではなかったかというふうには思うので、その辺の整理も少ししたほうがいいかもしれませんね。

ありがとうございました。お時間の許す限りということなので、議論は尽きませんけれども、時間の都合もありますので、この辺りで一旦意見交換は終わりとさせていただきたいと思います。

いろいろご意見をありがとうございました。資料3の先ほど「『江戸』の魅力と価値を再考する」という資料をお渡ししましたが、今いただいた、結構深いところの議論ですけれども、それも踏まえてレポートを整理したというふうに思います。ブラッシュアップといいたいでしょうか。

先ほど平和の問題とか、言葉の問題とか、もし世界遺産、外に説明するなら、言語化する必要があるけれども、その言語にするときの仕方みたいなものも、できるだけ、確かに今ビジュアル化という中で、動画を使うとか、そういうことでやっぱり見せ方も変えないとなかなか難しいし、先ほどPRの仕方のお話もされましたけど、特に楽しむという中で、ハードは大分減ったのですが、ソフトはたくさん残っていると。その深掘りももう一回いろんな地域でしてみる必要があるかなと。

それから、最後ですが、やっぱり全国にある江戸の残っている文化をどうやって我々が、東京の人間が知ろうとするか。その知ろうとすることによって回遊性をつくる。プロセスの第一歩を踏む。それは極端に言ったら、やっぱり江戸の町に住んでいる今の東京の人間が第一歩を踏まないと地方からは多分出てこないの、それによって全国の街道をうまく利用していくようなことができるかもしれませんね。

そういうところも少し整理して、ブラッシュアップしたいというふうに思います。したものを、東京の観光振興を考える有識者会議で私のほうから報告したいと思いますけれども、よろしゅうございましょうか。

（「はい」と声あり）

【田川座長】

ありがとうございます。

それでは、また資料案につきましては、事務局には本日いただいた内容を整理して反映していただくようによろしくお願いしたいと思います。

本部会が本日最後でありますけれども、産業労働局の安部次長から一言よろしくをお願いします。

【安部産業労働局次長】

産業労働局次長の安部と申します。

委員の皆様におかれましては、御多忙の中、江戸の歴史・文化が有する奥深い魅力や価値、また、今日は、全国に残る江戸文化を知って、それを回遊につなげていくという貴重なお話をいただきました。誠にありがとうございます。

また、田川座長におかれましては、限られた時間の中で円滑に会議を運営していただき、誠にありがとうございます。

江戸から続く伝統と最先端の文化の共存こそが東京の特色でございます。有形・無形の様々な形で今に息づく江戸の多彩な魅力は、東京が世界に誇る観光資源でございます。

この部会で御議論いただいた内容を踏まえ、江戸の歴史・文化を活かした観光振興を一層推進し、観光都市としての国際競争力の強化につなげてまいりたいと考えております。

本部会は本日が最後の開催となりますが、委員の皆様におかれましては、今後とも御指導と御助言を賜りますようお願い申し上げます。どうもありがとうございました。

【田川座長】

どうもありがとうございました。

それでは、最後に私のほうから一言というか二言というか。

やればやるほど深みにはまっていくような、そういうイメージが江戸はあるなど。まだまだ議論が足りない部分もあるし、それから、特に本当に世界遺産に本気で登録するのであれば、相当深めないといけないなという部分があります。

それから、今、こういう時代背景なので、やはり「平和」というのがキーワードで。先ほど徳川家広委員からいただいた「平」と「和」の人間関係と平らにするということをちょっと深掘りしてみると、なかなかこれは学校教育に使えるのではないかというふうに思いますね。

我々は、この間、ノーベル平和賞をいただくような話になりました。それは原爆の話ですけども、そうじゃなくて、日本人は平和について一番発信してもいいのかなという、役割と言うと大げさですけど、そういう一種の義務みたいなものがあるのではないかと。

そういう意味では、今回は江戸を深掘りしましたが、その結果、平和みたいなものに言及できれば、この部会は成功だったかなというふうに思いますので、ぜひ御期待をいただきながら。

また、今日は終わりですけども、まだまだお聞きしたいこともありますから、機会あるごとにまたヒアリングもさせていただきますので、改めてよろしくをお願いしたいと思います。

一応今回最後でありますので、これで江戸の歴史・文化部会の会議は終了いたします。ありがとうございました。